

東松山・吉見で「戦争と平和を考える」旅

秋真っ盛りの好天、ところが残暑のような暑さ。今回の参加は 27 名。解説は、近現代史ゼミ講師の内藤真治さん、歴教協の久保田順一さんが担当しました。



（第 8 部《救出》）（左端が位里、その右 3 人目、頭に布を被っているのが俊）

1、原爆の図・丸木美術館

丸木位里、俊夫妻が位里の故郷の広島に入ったのは被爆の数日後、それから約 1 か月滞在して救出活動を行った。その姿が原爆の図・第 8 部《救出》に描かれている。

原爆の図を描こうと決意しデッサンを始めたのが 1948 年、全 15 部の内最初の 3 部作は 1950 年に完成、すべて夫妻の共同制作。この年から原爆の図は全国を巡回することになり、4 年間で 170 か所、約 170 万人が観た。高崎市でも 1952 年 8 月、高崎学生懇談会の主催で「原爆展」（高崎貿易会館）が開催されている。56 年からは海外を巡回したが、アメリカでの展示（70～71）では厳しい批評に接し、夫妻は戦争の加害性も意識するようになる。それは第 13 部《米兵捕虜の死》に反映している。75 年以降に描かれた《アウシュビッツの図》《南京大虐殺の図》《水俣の図》《水俣・原発・三里塚》では、テーマは原爆の被害を越えて、広く人間を苦しめる暴力に広がった。この 4 つの絵は新館ホールに展示されている。ちなみに《アウシュビッツの図》は高さ 3.4m、幅 16m、有名なピカソのゲルニカが幅 3.5m、幅 7.8m だから、高さはほぼ同じ、幅は約 2 倍にもなる巨大なもの。その迫力と表現のエネルギーに圧倒される。

学芸員の岡村幸宣さんに、2 階の展示室の第 8 部《救出》と第 1 部《幽霊》の前で解説していただいた。原爆の図はキノコ雲などではなく、ひたすら人間を描いている。第 1 部《幽霊》では、左隅の妊婦の姿が最初に描かれた。原爆の図には確かにそこにあった命が描かれていると語ったのが強く印象に残っている。岡村さんは著書『《原爆の図》のある美術館』（岩波ブックレット）でも「はじめに描いたのは、左端の妊婦像です。原爆が現在だけでなく未来の命をも傷つけ、奪い去る可能性を暗示したのでしょうか。それとも無数の命を奪った原爆に対峙する



ため、これからの命を生み出す存在を描いたのでしょうか。」と述べている。

美術館を出たところにある木造の茶室、隆隆庵（るるあん）で、丸木夫妻の姪で、養子となった丸木ひさ子さんが、私たちのためにお茶を用意してくださった。眼下に広がる都幾川の広々とした風景、丸木位里の故郷、広島の大田川に似ているのだそうで、ここは丸木夫妻が晩年アトリエとして使った場所だ。

2、埼玉ピースミュージアム （埼玉県平和資料館）

パンフレットに「戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝えるため、平成5年8月1日に開館」とある。関係資料の展示、解説の他に、戦前戦中の住宅、戦時下の教室、防空壕などが再現されていた。歴教協の岩根さんによれば、「埼玉県は大規模な空襲が比較的少なかった県。それでも県立の資料館をつくったことは評価できる。今、前橋でも平和資料館をつくる動きがあり、行政レベルで動き出している。」とのこと。近現代史ゼミ講師の内藤さんは「県立の平和資料館として貴重な存在。栃木や群馬でも、「平和資料館を!」という運動はあるが、民間の力だけではなかなか難しいのが現状。戦後74年、年ごとに減る戦争体験者、『歴史の継承』にどう行政を巻き込んでいくか。みんなで考えるヒントにしたい。埼玉の当館では、『加害』の視点が弱いと感じる。」と述べています。

最後に、海拔147.5mの展望塔に登ると、関東平野が一望でき、彼方に富士山も確認できた。

3、吉見百穴（国指定史跡）

吉見の百穴は古墳時代の後期から終末期（6世紀末～7世紀後半）に造られた横穴墓群。1887年の発掘では237基の横穴が確認された（地下工場をつくる過程で十数基が破壊され、現存するのは219基）。

太平洋戦争の末期には米軍機の空襲下で生産を続けるため、地下工場がつけられた（中島飛行機(株)大宮製作所）。総面積2800㎡（約1万坪）、陸海軍の航空機の発動機（エンジン）を月産300台製作する計画で1945年6月から稼働したが、



敗戦時までに製作されたのは動力部品の一部だけだった。この地下工場の工事のために多数の朝鮮人労働者が使われた。残念ながら、今は内部に立ち入ることができない。

4、菅谷館跡（国指定史跡）

パンフレットには、菅谷館は鎌倉時代の有力武士、畠山重忠（1164～1205）が居住していたと説明されている。そして、実際、遺構のすぐ脇を鎌倉街道（上道）が通っていたと思われる。しかし、現在の遺構は鎌倉時代のものではなく、戦国時代に整備された城址。15世紀末、山内（やまのうち）上杉氏と扇谷（おおぎがやつ）上杉氏との抗争の中で、山内氏が須賀谷（菅谷）旧城を再興、1646年、北条氏によって扇谷上杉氏が滅亡したため、その戦略的価値が失われて廃城になったとみられる。15世紀末の城としては大規模（約13万㎡・東京ドーム3個分）で、数千単位の軍の駐屯が可能だったのではないかと推測されている。この城址は残存状態が良く、国指定史跡となっている。



《文責 設楽春樹》